

日中再生説話比較研究

— 現世と冥界の往復を中心として —

劉 成 竜

Abstract

A long time ago, people began to grow fearful of the netherworld, and wanted to understand it. Soon, as a result, the rebirth story (SAISEI SETUWA) came into being. In it, characters who had experienced death told of their experiences in the netherworld, and through this story we can catch a glimpse of ancient people's understanding of the netherworld. In the Chinese classical rebirth story, the distance between the real world and the netherworld is clearly written, while in the Japanese-Chinese story, a boundary exists between life and death. The characters can go through the boundary into the netherworld, and return to the real world. In the Chinese story, the characters enter the netherworld by a horizontal move, and come back to the real world by a perpendicular move. In the Japanese version, the characters go into the netherworld by falling perpendicularly into a hole. In this thesis, I will define the differences in the distance and boundary between the real world and the netherworld in the Japanese and Chinese versions of the rebirth story.

キーワード……日中再生説話 現世と冥界 距離 一線 坑

はじめに

遠い昔の頃から、無数の人々が不老不死、再生の術を求めたものの、結局「死」という宿命からは逃れられなかった。こうした中で、死後の世界への恐怖心と、その世界を知りたいと願う好奇心が芽生え、やがて再生説話が発生するに至ったものと考えられる。中国では、六朝時代から唐宋にかけて多数の再生説話が存在している。宋代に編纂された類書の一つである『太平広記』全五百巻には、九十二項目の部立てが存在し、その中でも再生部は十二巻、計百二十八話が収録されている。さらに他の部立てにも、再生説話に類する話が見られ、古代の人々の感心の高さがここからも窺い知れる。こうした中で、死を体験した登場人物が、冥界を往復する状況や冥界での出来事を語る、という記述内容からは、古の人々の冥界に対する認識を垣間見ることができよう。

日中の再生説話を比較した先行研究においては、特に『日本霊異記』が、中国の『冥報記』をはじめとする六朝・唐の説話に影響を受けていることについて論じるものが多い¹⁾。また、再生説話に関する従来の論文では、再生説話の構造や要素、仏教の影響などについて多く論じられている²⁾。本稿では、日中の再生説話に関する先行研究を踏まえた上で、これまで論じられることがあまりなかった現世と冥界における往復距離と、移動方向の二

つに焦点をあて、はじめに中国の説話を取り上げ、次に日本の説話を挙げて比較を行うことで、冥界認識に関する日中の相違点を考察したい。考察対象としては、『太平広記』及び六朝・唐の古小説集、ならびに日本で中古・中世を代表する説話集といえる『日本霊異記』、『今昔物語集』、『宇治拾遺物語』に収められた再生説話を中心に分析を行う³⁾。

1 現世と冥界との距離

中国の再生説話の中で、登場人物が冥界に行く際に、冥界の役人が現れ、その役人に導かれて冥界に行く、という展開が非常に多く見られる。その中には、冥界の目的地に至るまでの距離がどれぐらいであったのかについて、明記している資料も存在し、『太平広記』の中から全三十八例が看取された。「孫廻璞」には、次のような記述が見られる。

① 「孫廻璞」〔『太平廣記』卷三百七十七、出『冥報記』〕

唐殿中侍醫孫廻璞、濟陰人也。貞觀十三年、從車駕幸九成宮。三善谷、與魏徵隣家。嘗夜二更、聞外有一人、呼孫侍醫者。璞謂是魏徵之命、既出、見兩人。謂璞曰、「官喚。」璞曰、「我不能步行。」即取馬乘之。隨二人行、乃覺天地如晝日光明、璞怪而不敢言。出谷、歷朝堂東、又東北行六七里、至苜蓿谷。遙見有兩人、持韓鳳方行。語所引璞二人曰、「汝等錯追。所得

者是。汝宜放彼。」人即放璞。璞循路而還、了了不異平生行處。

（唐の殿中侍醫孫廻璞は、濟陰の人なり。貞觀十三年、車駕の九成宮の三善谷に幸するに従ひ、魏徵と家を隣る。嘗て夜二更、外に一人の、孫侍醫を呼ぶ者有るを聞く。璞是れ魏徵の命と謂ひ、既に出で、兩人を見る。璞に謂ひて曰く、「官喚ぶ。」と。璞曰く、「我歩行する能はず。」と。即ち馬を取り之に乗る。二人に随ひて行くに、乃ち天地の昼日の如く光明なるを覚え、璞怪しむに敢へて言はず。谷を出で、朝堂の東を歴、又東北に行くこと六七里にして、苜蓿谷に至る。遙かに兩人有り、韓鳳方を持ちて行くを見る。璞を引く所の二人に語りて曰く、「汝等錯りて追ふ。得る所の者は是れなり。汝宜しく彼を放つべし。」と。人即ち璞を放つ。璞路に循ひて還り、了了として平生の行く処に異ならず。）

孫廻璞は、冥界からの役人のことを魏徵の部下と思い込み、そして歩けないので馬に乗って、そのまま二人について行ってしまった。夜なのに昼のように明るいことを不審に思ったが、更に六七里進んだ。その後、人違いであるとわかって、孫廻璞は還らされる、という話である。この話に見える九成宮は、隋の時代に仁寿宮という名で関内道岐州麟遊県（現在の陝西省麟遊県）に建設された離宮であり、隋末には荒廃したが、唐の貞觀五年（六三一年）に修復されて九成宮と改名されるに至った、実在する宮殿名である⁴⁾。一方、孫廻璞が冥界の役人に連れられてたどり着い

た昔菴谷という地名は、『中国歴史地名図集』（第五冊「隋・唐・五代十国時期」）や『中国歴史地名大辞典』において確認できず、また『旧唐書』及び『新唐書』にも記載が見られないことから、架空の地名であろうと考えられる。昔菴谷が架空の地名であると考えれば、それは冥界の地名である可能性が高く、したがって孫廻璞は六七里の距離、即ち唐代の一里は約五百六十mであったため、少なくとも三・四km以上の距離を移動して、冥界にたどり着いたこととなる。この話では、移動距離が六・七里となっていたが、中国の再生説話の中には、十里以上の距離を移動する話も多数見られ、遠いものでは「二十余里」、現在の距離に改めれば千百二十km余り、となっている話も存在する。これらの距離が必ずしも現実的な数値として記述されているとは限らないが、現世から冥界への移動を比較的長距離と認識する話が、中国の再生説話に多く見られる点は注目に値しよう。再生説話の移動距離に関しては、次に挙げる表一「移動距離一覧表」を参照されたい。

表一 「移動距離一覧表」(筆者作成)

話名	出典	移動距離		本文該当箇所
		往路	復路	
王璠	冥報記		二百步	但東行二百步、有墻穿破見明、可推倒、即至君家。
崔環	玄怪錄	數百步		行數百步、入城。
孫明	廣異記	可五六里		行可五六里、至一府門。
孫廻璞	冥報記	六七里		出谷、歷朝堂東、又東北行六七里、至昔菴谷。
趙泰	冥祥記	數里		說初死之時、夢有一人、來近心下。復有二人、乘黃馬。從者二人、夾扶泰腋、徑將東行。不知可幾里、至一大城。
潘尊師	廣異記	可數里		俄爲人所擄、行可數里、至一甲第。門前悉是群龍、入門十餘步、有大廳事。
劉憲	宣室志	數里		即與偕往、出城數里、至一公署、見冥官在廳。
吳全素	玄怪錄	約數里		出關遠門二百步、…約數里、入城即見官府。
唐方開山	冥報拾遺	可十餘里		初死之時、被二人引去、行可十餘里、即上一山。
金壇王丞	廣異記	十餘里		甲倉卒隨去、出城行十餘里、到一府署。
薛濤	廣異記	可十餘里		行可十餘里、至一城。
霍有鄰	廣異記		十餘里	有鄰拜辭訖、出門十餘里、至一大坑、爲吏推落、遂活。
六合縣丞	廣異記		十餘里	遣女子隨丞還、行十餘里、分路各活。
周頌	廣異記		十餘里	乘令道人送頌、行數里、其人大罵云、…如得五千貫、當送汝還、…使者乃行十餘里、至一石井。
蘇履霜	玄怪錄	一二十里		履霜遂行、一二十里間。果逢舍利王七飛。
沈車口	集異記	可二十里		二吏呵驅甚迫、遂北行可二十里。
李及	廣異記	三十餘里		行三十餘里、至三門、狀若城府。
裴齡	廣異記	五十里		吏出門行十餘里、揮火乃絕。唯一逕在衰草中、可行五十里、至一城。
程逸人	宣室志	約五十餘里		約五十餘里、滿滿丈夫朱衣、仗劍怒目、從空而至。
崔紹	玄怪錄	五十許里		王遂行、紹次之、二使者押紹之後、行五十許里。
朱同	史傳	可五十里		倉卒隨去、出樓陶城、行可五十里、見十餘人臨河飲酒。
許深	河東記下	六七十里		其北可行六七十里、荆棘榛莽之中、微有徑路。
李推宗	祥異記	數十里		說初有一百許人、縛推宗、去數十里、至一佛園。
智達	冥祥記	數十里		二人引達將去、行數十里。
盧氏口	廣異記	可數十里		行可數十里、至一城、城甚壯大。
張質	續玄怪錄	數十里		出數十里、至一栢林、使者曰、「到此宜下馬。」遂步行百餘步、入城。
李簡	酉陽雜俎	數十里		行數十里、至大城、署曰王城。
李公石	酉陽雜俎	數十里		不覺向北、約行數十里、至野外。
杜龍舉	朝野僉載	凡數十里		直北上邛山、可十餘里。…尋小徑東行、凡數十里、天氣昏慘、如冬凝陰。
僧法正	酉陽雜俎		數十里	因隨吏行數十里、至一大坑。
陳安岳	冥祥記	三百許里		行三百許里、至一城府。
王掄	通幽記		數百里	掄家在西定遠、去中城數百里、便見一山下有崎嶇小道。
貝籍	稽神錄	二千餘里		云已行二千餘里矣、向曉復行、久之、至一城。
張延之	數十里	百餘步		行數十里、至一所、有府署。…因爾遂出、行百餘步。
董觀	宣室志	十餘里		行十餘里、至一水、穢不可近。…至數里、又見一人。
張汶	宣室志	十餘里		牽汶袂而去。行十數里、路曠黑不可辨。…可行百餘里、方覺其影稍近。
劉灑	宣室志	數百里		經高原大澤數百里、抵一城。…寶遂告別、未十餘里。
許文度口	宣室志	數百里		四望間、寂然無雜犬聲、且不知幾百里。…又行十餘里、至一水。…於是金人與文度皆行數十里、俄見里門、喜不勝。

また、移動距離が極めて遠い場合には、途中で宿に泊まることもある。「貝禧」という話の中で、冥界に行く場面のみを挙げることとする。

②「貝禧」〔太平廣記〕卷三百七十八、出『稽神録』

乃出門、與周殷各乘一馬。其疾如風、涉水不溺。至暮、宿一村店。店中具酒食、而無居人。雖設燈燭、如隔帷幔。云已行二千餘里矣。向曉復行。久之、至一城。

（乃ち門を出で、周殷と各おのの一の馬に乗る。其の疾きこと風の如く、水を渉るも溺れず。暮れに至り、一の村店に宿る。店中に酒食を具ふるに、居る人無し。灯燭を設くと雖も、帷幔を隔つるが如し。云ふに已に行くと二千余里なりと。暁に向んとして復た行く。之を久しくして、一城に至る。）

ここでは、貝禧が冥界に召されることになり、二人の判官とともに移動している。冥界までの距離は二千里を超えるものとなっており、ここで馬に乗っているのも、距離が遠いためである可能性が考えられる。その上、馬の速さは風のように、川を渡つても溺れないと、極めて特殊な様子が描かれている。それでも、あまりにも遠いため日暮れとなり、「店」と記される宿で一晩を過ごすことになる。安田真徳氏は、冥界での「店」について、次のように指摘している⁵⁵⁾。

冥界からの帰り道が現世の旅の様子を反映しているとすれば、現世での旅に欠かせない「店」(宿)があつても不思議はない。帰途、日が暮れて泊まる場合、初期の再生譚では樹下や小窟で夜を明かしている例が見られ、やがてそれが「店」に変わっている。また、行く道にも「店」が見られる例もある。このことから、宿の形態も時代が下るにつれて発展が見られるといえよう。

貝禧の話では、冥官としての仕事を与えられたため、冥界へ行くという筋になっている。唐代の中国においては都から左遷された人や、あるいは辺鄙な地から都に出て試験を受ける人など、何十日もかけて数千里を移動するのは普通のことであり、冥界への移動にもこのような現実社会の様子が反映されている可能性があるのではないだろうか。

さらに、唐代には、交通網が大いに発展を遂げた。国内の交通路線の総延長が二万五千里以上あり、亭駅が千六百箇所以上も設置されていた⁵⁶⁾。また、民間人が食事付きの宿舎(店)を経営することもあり⁵⁷⁾、遠距離の旅が当時において日常的であった実態を窺い知ることができる。現実社会における交通網の発達が、再生説話という虚構の世界にも影響を与え、長距離の移動や店の存在を示す描写に繋がったものと考えられる。

一方、日本の再生説話においても、冥界に赴く際に、役人が迎えてきて、移動するという話が多いものの、中国の説話のように

具体的な距離が明示されている話は一例しか看取できなかった。この一例は、『今昔物語集』巻九の第三十二話で、『冥報記』を典拠とするものであり、先に挙げた「孫廻璞」と同じ話であり、それを見ることとする。

③ 「侍御史遼迥璞、依冥途使錯從途帰語」(『今昔物語集』巻第九第三十二)

此ノ二人ノ使、迥璞ヲ北ノ谷ノ口ニ引テ、朝堂ノ東北ヲ歴テ、六七里行テ苜蓿ノ谷ニ至ルニ、遙ニ見レバ、亦二人ノ人有テ、韓ノ鳳方ト云フ人ヲ引テ、将行ク。

この一例を除くと、漢籍を典拠とするもの以外は、日本の再生説話においては、現世と冥界との移動距離が基本的に記されることはなく、ここに中国の再生説話との大きな相違点が認められる。その理由の一つとして、中国は土地が広大で、都市と都市の間が遠く離れ、一日では目的地に着くことができないといった実体の反映が考えられる。中国の再生説話では、冥界にも官僚組織が存在するなど、現実社会を反映させた描写が随所に見られ、このことから考えると、冥界への移動距離についても現実社会の投影が見られることは、さほど不思議でないものと言えるであろう。馬に乗ったり宿に泊まったりする記述が見られる点についても、同じように考えられるのではないだろうか。これに対して、日本の再生説話では因果応報や仏教信仰、地獄の光景などの描写が説話

の主体となっていて、距離に対する意識が薄く、従って具体的な数値もほとんど記されなかったものと考えられる³⁰⁾。

2 冥界と現世の間に存在する一線

先に用例①として挙げた「孫廻璞」の話では、彼が死の自覚を持たず、そのまま冥界に向かうという展開になっていた。前野直彬氏は中国の再生説話において人が冥界と現世を出入りする描写に着目して、以下のように述べている³¹⁾。

しかし、以下の諸例にも見るように、冥界を訪れる人の多くは、往きにはその自覚を持たず、しごく簡単にそこへ入って行く(死ぬのは簡単なことだから)。しかし冥界からの帰りに、幽冥の境をなす一線を、何かの方法によって乗り越えねばならない(生きかえるのはたいへんに困難なことだから)。

気付かないうちに簡単に冥界へと足を踏み入れる反面、生き返るにはよほどの理由がなければならぬ、ということが指摘されている。前野氏がここで言う「幽冥の境をなす一線」とは、死生を隔てている境界の存在を示唆するものと考えられる。その一線を乗り越えることによって冥界に行くこととなり、また現世への帰還ができることとなる。中国の再生説話では、冥界へ行く時には遠い道のりを移動するのに対して、現世への帰路では山から落ち

たり、穴に落ちたりするなど、特殊な行動を経た後に、夢のようなほんのわずかの時間で生き返る、という話が複数存在している。更に移動の方向を大まかに分類すると、冥界に行く時が水平方向であるのに対し、現世に帰る時は垂直方向となることが多いようである。この点について、まず「坑」に関する話を取り上げる。「鄧儼」の該当箇所では次のように記されている。

④「鄧儼」〔『太平廣記』卷三百七十八、出『酉陽雜俎』〕

旁有一人謂鄧、「既不能書、可令還也。」蔣草草被領還、隕一坑中而覺。因病、右手遂廢。

（旁らに一人有りて鄧に謂ふ、「既に書く能はざれば、還らしむべきなり。」と。蔣草草として領せられて還り、一の坑中に隕ちて覺む。病に因り、右手遂に廢す。）

この話では、蔣古という者がある日、突然病にかかって死亡し、冥界にやって来たところ、生前に上司であった鄧儼から、大量の文章を記述するよう依頼される。そこで蔣古は右腕を負傷したと嘘をつき、現世に帰れることになるが、帰る途中で「坑」に落ちてしまい、後に目が覚めると生き返っていた、という展開になっている。「坑」は「地面にあいた穴やくぼみ。」という意味がある一方、秦代に行われた「焚書坑儒」に代表されるように、「生き埋めにする。」という意味も存在する¹⁰。生きた人間が入る、或いは入れられる穴として認識されていた「坑」が、再生説話の中で

は、生き返る際の一線として描かれている点は極めて興味深いといえよう。実際に、一度死んだとみなされて埋められたが、実は生き続けていた人間が、一定の時間を経た後に穴の中から出て来る、という現象が、古の中国では日常生活の中に少なからず存在し¹¹、こうした実態に影響を受けて、再生説話の中で「坑」に特別な機能が与えられるに至った可能性も考えられよう。六朝から唐宋五代にかけての再生説話全体の中で、「幽冥の境をなす一線」として、「坑」の記述が見られる話は全十五例と、一定の分量が看取された。このことも、「坑」と生者とを結びつける発想が、ある程度の普遍性を有していた裏付けになるものと考えられる。再生説話に見られる一線の分布状況については、次に挙げる表二「中国の再生説話における生への一線」に示した通りである。

表二 「中国の再生説話における生への一線」(筆者作成)

生死を隔つ一線	話名	出典	本文該当箇所
水	支法衡	冥祥記	衝濁、欲飲水、乃墮水中、因便得蘇。
	王忠幹	酉陽雜俎	至荒野、遇大河、欲渡無因、…纔頭低未舉、神人把腰、擲之空中、久方著地、忽如夢覺。
井	周頌	廣異記	遂推頌落井而活。
	任義方	法苑珠林	遂落坑中、應時即起。
坑	方山開	冥報拾遺	及下山、見一大坑、極穢惡、忽被二人推入、須臾即蘇。
	齊士望	法苑珠林	使者推之、遂入坑內、不覺漸蘇。
	李知禮	冥報記	知禮惶懼、委身投坑、即得蘇也。
	孟知儉	朝野僉載	遂至荒榛、入一黑坑、遂活。
	張御史	廣異記	某因冥然如落深坑、因此遂活。
	崔明達	廣異記	明不識其屍、但見大坑、吏推明達於坑、遂活。
	霍有鄰	廣異記	至一大坑、爲吏推落、遂活。
	鄭成	廣異記	驛前有一大水坑、令成合眼、推入坑中、遂活。
	河南府史	廣異記	令左右以竹杖染水、點其足上、因推坑中、遂活。
	李虛	紀聞	燈旁有大坑、昏黑不見底、二吏推墮之、遂蘇。
	僧法正	酉陽雜俎	因隨吏行數十里、至一大坑、吏因臨坑、自後推之、若墮空焉。
	鄧儼	酉陽雜俎	蔣草草被傾還、墮一坑中而覺。
	寶德玄	報應記	出墮坑中、於是得活。
	李丘一	報應記	至一坑、策推之、遂活。
高巖(山)	劉薛	塔寺記	語竟、如墜高巖、忽然醒寤。
	孫廻璞	冥報記	即推璞墮山、於是驚悟。
	梁氏	冥報拾遺	始送令歸、初似落深崖、少時如睡覺。
徑舍	唐張公瑾	冥報記	遣使者送嘉運、至一小澗徑、指令由此路歸、嘉運入徑便活。
牆	隋孫寶	冥報記	指一空舍、令寶入中、既入而蘇。
門	裴則子	冥報拾遺	及登牆、望見已舍、遂聞哭聲、乃跳下牆、忽覺起坐。
	延陵村人妻	稽神錄	因逐之使廻、走出門、遂蘇。

「坑」は、地面に掘られることから明らかなように、移動の方向としては垂直になる。そして、同じく垂直方向の移動を示す話として、山から落ちる記述の見られる「劉薛」を次に挙げることにする。

⑤ 「劉薛」(『太平廣記』卷三百七十九、出『塔寺記』)

語竟、如墜高巖、忽然醒寤。

(語り竟はるに、高巖を墜つるが如く、忽然として醒寤す。)

突如病にかかって死亡した劉薛は、冥界で觀世音菩薩に会い、仏教に皈依するよう勧められて再生を許され、その後高い崖から落ちたようになり、目を覚ます。「如く」と記されているため、あくまでも劉薛の感覚にすぎないが、高い崖から落ちるということは、それまでの劉薛が冥界の中で山のような高い所にいた可能性を示唆している。中国では、遠い昔から山岳に対する信仰があり、山には神が住んでいて、また山自体を神と見なす考え方が存在していた。そこで、人が死んだ後に、魂は山へ、中でも具体的に泰山へ赴くという説が出現するようになる。即ち山は、古代中国において冥界の一種であると考えられていた。この点については、すでに先学の論考が多く存在する。伊藤清司氏は『死者の棲む楽園―古代中国の死生観』の中で¹²⁾、

ただし、泰山が冥界の本山視されるようになったのは、『山海

『経』の成立よりはるかにのちの時代であつただろう。その時期は大まかにいえば漢代。漢の熹平四年（一七五）頃には泰山冥界の信仰がすでに長安地方に広がっていたことが、西安出土の「熹平四年十二月瓶」に記された「生人ハ西、長安ニ属シ、死人ハ東、大山ニ属ス：」の記文によって理解されるから、おそくても後漢中頃には成立していた可能性がある。

と指摘している。山が冥界である以上、山から落ちることで冥界から離脱し、現世に帰還して再生を果たす、という発想は容易に理解できよう。そして、右の「劉薛」の話に見られたような、高巖や山から落ちることで再生を遂げる、という記述は、中国の再生説話において全三例見られ、何れも山岳信仰、特に泰山信仰の影響を受けたものと考えられる。

一方、日本の再生説話においては、中国の説話に基づく類話を除くと、「水」や「穴」に落ちたり、高い山から落ちたりして生き返る、という話は看取されなかった。しかし、日本の再生説話では往路、即ち死亡する場面で「穴」に垂直に落ちる、という話が二例看取された。まず、『今昔物語集』卷十七の第十九話「三井寺浄照、依地藏助得活語」を見ることとする。

⑥ 「三井寺浄照、依地藏助得活語」〔『今昔物語集』卷第十七第九）

其ノ時ニ、俄ニ猛キ者二人出来テ、浄照ヲ搦メ捕ヘテ、駆追

テ黒山ノ有ル麓ニ至ル。其ノ山ノ中ニ大キニ暗キ一ノ穴有リ。即チ浄照ヲ其ノ穴ニ押シ入ル。其ノ程、浄照心迷ヒ肝碎テ、思ユル事無シ。但シ、纔ニ心有テ自ラ思ハク、「我レハ死ヌル也ケリ。」穴ニ落入ル間、風極テ猛クシテ、二ノ目ニ風当テ、甚ダ難堪シ。然レバ、二ノ手ヲ以テ自ラ目ニ覆フ。而ル間、遥ニ墮テ、閻魔ノ序ニ至ヌ。

これは、浄照という僧侶が追いたてられるようにして山の中にある穴に落ちてしまい、閻魔のいる役所にたどり着く、という話である。穴は暗く、中の風は強く、そして極めて深いと描写している。この穴に関しては、新編日本古典文学全集『今昔物語集』の語注に、「死者が暗い穴を落下して冥途に至るといふ考えは一般に見られるもので、本卷第二十二話にも見られる」との指摘がなされている¹³⁾。しかし、「一般に見られるもの」という点をめぐっては、丸山顕徳氏が、『日本霊異記』に収められている冥界説話を考察した上で、以下のように述べている¹⁴⁾。

例えば、日本神話という黄泉国は、横穴式古墳説をとるにしろ、殯宮説をとるにしろ、黄泉津比良坂の存在から、地下の世界と想像されていたことがわかる。また仏教という地獄は、奈落の底という言葉に象徴されるように地下数万由旬というところにあるとされている。要するに両者の方向はともに地下に向っていることがわかる。しかし、日本霊異記の冥界を

調べてみると、明らかに地下であるとする説話は一話もみあたらない。

このように、『日本霊異記』の段階では穴に落ちて冥界に行く、という話が見られず、時代が下るにつれて冥界への認識が変化し、そこへ至る経路にも新たな種類が発生したものと考えられる。また、右の三井寺の浄照の話では、冥界へと移動する途中の描写が、読み手に一種の恐怖感を与えるものとなっている。このことに關して、先に挙げた新全集の語注でも言及されていた『今昔物語集』巻第十七の第二十二話「賀茂盛孝、依地藏助得活語」の中では、一層の恐怖感を覚える記述がなされている。以下に当該部分を挙げることにする。

⑦「賀茂盛孝、依地藏助得活語」(『今昔物語集』(巻第十七第二十
二)

沐浴シテ上ル間、忽ニ絶入ヌ。即チ盛孝大ナル穴ニ入テ、頭ヲ逆サマニ墮下ル。而ル間、目ニ猛火ノ炎ヲ見、耳ニ叫ビ泣ク音ヲ聞ク。四方ニ震動シテ雷ノ響ノ如シ。其ノ時ニ、盛孝心迷ヒ肝碎ケテ、音ヲ挙テ泣キ悲ト云ヘドモ、更ニ其ノ益無し。而ル間、高樓ノ官舎ノ有ル庭ニ到リ着ヌ。

引用部分では、盛孝という男が沐浴をしている際に急死してしまい、頭を逆さにして大きな穴を落ちていく、という記述がなさ

れている。そして、落下する途中の様子として、「猛火ノ炎」や「叫ビ泣ク音」など、恐怖心を大いに掻き立てる表現が、極めて具体的な形で含まれている。中国の再生説話における穴が、生き返る際の線として描かれていたのに対し、日本の再生説話の場合、同じ穴であっても冥界に赴く際の線と位置づけられており、更にそこには恐怖を駆り立てる要素が盛り込まれている点は、極めて対照的と言える。『日本国語大辞典』の「穴」の項によると、「墓穴をもう。…*今昔(1120頃か)一一・一『此、幸也。我が死なむ日は穴を同くして共に可埋(うづむべ)し』」と記されている¹⁵⁾。則ち『今昔物語集』の再生説話における穴は、冥界への入り口と認識されており、その穴を落ちることは死に直結すると考えられていたようである。そして、死という現象を忌み嫌い、恐れるという発想から、恐怖心を強く抱かせるような記述が、穴を落ちる描写の中に書き加えられるようになったのではないだろうか。

おわりに

再生譚と目しうる説話は、日中の双方に古くから多数存在しており、それらの説話群においては冥界の描写をはじめ、様々な共通点が存在する。しかし、現世と冥界との移動状況に焦点を当てると、移動距離の記載や宿泊に関する言及の有無、また垂直方向への移動に対する認識の差異など、日中の再生説話には少なから

ざる異同が見られることも明らかとなった。中国の再生説話が当時の実社会を色濃く反映させ、また「坑」のように漢字固有の象徴性を重視する傾向にある一方、日本の再生説話では再生理由を因果応報と関連づけたり、死に対する忌避の念を強調したりするなど、説話成立の背景に存する両者の相違点が、現世と冥界の往復をめぐる描写にも幾許かの影響を与えたものと考えられる。なお、本稿においては、垂直の移動という限られた方向についてのみ論じてきたが、再生説話に記されている移動の描写には、東西南北に代表される方位を明記した話も多数存在している。こうした日中再生説話に見られる方位の特徴に関しては、稿を改めて論じることとした。

〔注〕

- (1) 内田道夫「日本の説話と中国の説話―『日本霊異記』『今昔物語』を中心に―」(『日本文化研究所報告』五・六 一九七一年)、八木毅「日本霊異記と冥報記」(和漢比較文学叢書『上代文学と漢文学』所収 汲古書院 一九八六年)、潘寧「『日本霊異記』の冥界説話についての考察―和漢比較の視点から―」(『国際文化学』第二十五号 二〇一二年)などがある。
- (2) 前野直彬『中国小説史考』(秋山書店 一九七五年)、澤田瑞穂『中国の伝承と説話』(研文出版 一九八八年)、先坊幸子「六朝『再生説話』の研究―『中国中世文学研究』第三十四号 一九九八年)、小林真由美「中有と冥界―『日本霊異記』の蘇生説話―」(『成城国文学論集』第三十二号 二〇〇九年)、田崎篤朗「古代にみられる中国文化への憧憬と自土意識―『日本霊異記』における地獄観の成立をめぐる―」(『季刊日本思想史』第四十四号 一九九四年)、丸山顕徳「日本霊異記における冥界説話」(『日本霊異記の世界』所収 三弥井書店 一九八二年)、出雲路修『よみがえり』考―日本霊異記説話の世界』(『国語国文』第四十九卷十二号 一九八

〇年)などがある。

- (3) テキストは、『太平廣記』(中華書局 一九六一年)を用い、卷三百七十五「再生」(卷三百八十六「再生十二」)を中心に、他の部からも適宜追補を行なった。六朝・唐の古小説については、『拾遺記』(中華書局 一九八一年)、『博物志校証』(中華書局 一九八〇年)、『古小説鈎沈』(人民文学出版社 一九五一年)、『新輯搜神記 新輯搜神後記』(中華書局 二〇〇七年)、『冥報記 広異記』(中華書局 一九九二年)、『独異志 宣室志』(中華書局 一九八三年)、『玄怪録 続玄怪録』(中華書局 二〇〇六年)、『隋唐嘉話 朝野僉載』(中華書局 二〇〇五年)、『西陽雜俎』(中華書局 一九八一年)、『裴鉞傳奇』(上海古籍出版社 一九八〇年)、『稽神錄 括異志』(中華書局 一九九六年)、『纂異記 甘沢謠』(上海古籍出版社 一九九一年)、『博異志 集異記』(中華書局 一九八〇年)に基づいて調査を行った。また、『日本霊異記』、『今昔物語集』、『宇治拾遺物語』は、岩波書店の『新日本文学大系』を用いる。

(4) 趙文潤『兩唐書辭典』(山東教育出版社 二〇〇四年)を参照。

(5) 安田真穂「文言小説における再生譚に関する一考察―『太平廣記』を中心に―」(『中国学志』泰号 一九九六年)七二頁。

(6) 白寿彝『中國交通史』第三篇「隋唐宋時代之交通」第二章「隋唐宋底國內交通路線」(上海書店 一九八四年)に、「隋底幅員、東和南皆臨大海、北至五原(今綏遠五原)、西至且末(今新疆且末)、東北至遼西(今熱河朝陽及遼寧錦西一帶)、西南至安南。唐代盛時、『東極海、西至焉耆(今新疆焉耆)、南盡林州南境(在今安南境)、北接薛延陁界(今綏遠陰山北)」。隋地、東西九千三百里、南北一萬四千八百一十五里。唐地、東西九千五百一十里、南北一萬六千九百一十八里。隋唐交通幹路之長、至少應在二萬五千里以至二萬六千四百里之上。然唐有驛一千六百三十九所、驛三十里一置、應有驛路四萬九千一百七十里。若置驛之處皆臨大道、則唐代底交通幹路、不只在二萬六千四百里以上、並且幾乎有五萬里的路線了。」と記されている。

(7) 注六前掲書第六章「隋唐宋底館驛和交通律令」に「唐底私人旅舍事業、很發達。通典(卷七)說：『東起宋汴、西至岐州、夾路列店肆待客、酒饌豐溢。……南詣荊襄、北至太原范陽、西至蜀川涼府、皆有店肆、以供商旅、遠適數千里、不持寸刃。』這可見唐時私人旅舍事業之盛。」と記されている。

(8) 再生説話に限らなければ、距離に言及する記述は幾つか存在し、例

- えば『今昔物語集』巻第三の第一話「天竺毘舍離城浄名居士語」に、「我レ年老テ歩ミヲ運ニ不堪ズト云ヘドモ、法ヲ聞カムガ為メニ四十里ノ道ヲ歩ビ詣タリ。」、また巻第四の第十六話「天竺乾陀羅国絵仏、為二人女成半身語」に、「其ノ王、七重ノ宝塔ヲ起タリ。其ノ東ニ一里行テ、半身ノ絵像ノ仏御マス。」などと記されている。さらに、再生説話において、具体的な距離を言及しないものの、「二ノ駅」を使用して距離を表す記述は存在する。『今昔物語集』巻第二十の第十六話「豊前国膳広国、行冥途帰来語」に、「我此ノ二人ニ副テ行ク程ニ、二ノ駅ヲ渡テ行ニ路ノ中ニ大ナル河有リ。」と記されている。
- (9) 前野直彬『中国小説史考』Ⅱ「六朝・唐・宋の小説」第二章「冥界遊行」(秋山書店 一九七五年) 一二四頁。
- (10) 戸川芳郎監修『全訳漢辞海』第三版(三省堂 二〇一一年)を参照。
- (11) 『晋書』巻二十九「五行志下・人痾」に、「義熙中、東陽人莫氏生女不養、埋之數日、於土中啼、取養遂活。」と記されている。
- (12) 伊藤清司『死者の棲む楽園―古代中国の死生観』第一章「死者霊の棲む泰山」(角川書店 一九九八年)五六頁。
- (13) 馬淵和夫 国東文麿 稲垣泰一校注・訳『今昔物語集②』新編日本古典文学全集(小学館 二〇〇〇年)
- (14) 丸山顕徳「日本霊異記における冥界説話」、注二前掲。
- (15) 『日本国語大辞典』第二版(二〇〇〇年 小学館)

主指導教員(山本啓介准教授)、副指導教員(角谷聰准教授・矢田尚子教授)